

藤 本 武 編著

『日本人のライフサイクル

—労働者・農民の職業・生活歴—』

財団法人労働科学研究所，東京，1978年3月，217+ivページ

本書は労働力人口に関する既存のデータを整理し，さらに労働科学研究所が1976年9月から77年7月にかけて独自に行った5種の調査〔1. 男子労働者調査，2. 女子労働者調査（パートを含む），3. 希望退職者調査，4. 高齢退職者調査，5. 農民調査〕の分析結果をつみあげた労作で，次のような構成によって展開されている。

- I 「高度経済成長」下の就業構造の変化
- II 男子労働者のライフサイクルをめぐる諸問題
- III 婦人労働者のライフサイクルをめぐる諸問題
- IV 農民のライフサイクルをめぐる諸問題
- V ライフサイクルをめぐる政策課題

I章において本書はまず，「高度成長」期における産業構造の劇的な変化が就業構造にも投影し，農業労働力の1,000万にも及ぶプールが「高度成長」を可能にした要因の一つであることを指摘するとともに，その過程で非農林業内部においても産業構造の変化とその就業構造への投影が進み，技術革新に伴う労働の質の変容が労働力人口の配置と労働力生命の伸長というライフサイクルにおける労働のステージの変化を生んだことを詳述している。

産業構造の変化が就業構造に波及した結果，世代間における職業の伝承がうすれたことは，農業後継者にその典型をみることができる。これは「高度成長」期にみられた労働力人口の激しい移動とも関連して，重化学工業を中心に形成された労働力人口のかなりの部分がいわば「初代労働者」であったという労働力の新たな転換を生むことになったこと，経済の変動に伴って，その一部が農業への環流人口となりつつあること等の調査結果が示されている。農業後継者に予定される若年人口は，新規学卒労働力として一度は非農林雇用労働力となり，ライフサイクルのあるステージでその一部が農業に環流する労働力の流れの存在が立証されている。このような労働力の移動のとりえ方は，ライフサイクルを軸とする研究の成果であり，その背景にある労働の質の変容や，ライフサイクルの人口学的要因の変化を把握することが大切になるだろう。

重化学工業を中心に進展した「高度成長」期の就業構造は，いわば若年労働力による中高年労働力の代替に始まり，次第に「底辺労働力」による若年労働力の代替へと姿をかえ，経済成長の鈍化とともに，中高年労働力の就業問題が大きいくわびあがってきた。労働力生命以上に寿命が伸びているライフサイクルへの対応は，これからの大きな課題であり，本書が強調するように，すみやかな対応が要請される場所である。

本書は，婦人労働者のライフサイクルにも貴重な資料を提供している。男子と決定的に異なる女子労働力の構造は，そのライフサイクルに規定される労働力と非労働力との間の移動である。その意味で女子労働力の研究には非労働力の分析があわせて行われなければならないのではないだろうか。

ライフサイクルの実証的研究は，本来長期にわたる資料の蒐集とつみあげが必要であり，その作業には非常に困難がつきまとう。その意味で，労働者のライフサイクルに焦点をおいて各種の調査分析を行った本書の成果は高く評価されるべきものであろう。また本書のために行われた調査が非常に労多いものであったことは十分に推察される場所である。しかし，調査が主として労働組合を通して行われていることによって，調査客体の偏りが案じられること，調査の一部を mail survey に依ったため，その常として回収率が非常に低いことなどのおそれなしとしない。また女子労働力について，労働力から非労働力へ移行する動機づけおよび非労働力が再び労働力に参加するにいたるライフサイクルの研究に今ひとつ新しい視点が導入されることを希望する。この貴重な試みの今後の発展を期待したい。

(中野 英子)